

主な未侵入病害虫の解説

今回は、モモ・スモモ等核果類の重要害虫であるスモモゾウムシとモモキバガについて解説する。

スモモゾウムシは、北アメリカ大陸の原産で、アメリカ合衆国ではコドリノガにつく果樹の大害虫と見られている。ロッキー山脈東部のモモ生産地域では、1943年当時その損害は、約30億円に達したと言われ、またカナダのケベック州では1957年に50～70%の果実が落下する大被害があったと言われている。本虫が未分布のカリフォルニア州では発生州からの侵入を防ぐための州間検疫が行われており、またヨーロッパでも各国が本虫の侵

入を非常に警戒している。

モモキバガは、西アジア原産と考えられている。その後、地中海沿岸、ヨーロッパ、さらに北アメリカへと果樹苗木や生果実に付着して広がっていったものと思われ、現在では、アメリカ合衆国内のモモ生産地全域に分布している。

気候が温暖で寄主となる果樹が広く栽培されている我が国に、この2種の害虫が侵入・定着すれば、大被害が予想される。このため我が国は、この2種を特定重要病害虫に指定し、厳重な検疫を行っている。

スモモゾウムシ

学名：*Conotrachelus nenuphar*
(Herbst)

英名：Plum curculio

分布 アメリカ合衆国、カナダのロッキー山脈の東側。

寄主 モモ、スモモ、アンズ、ネクタリン、リンゴ、オウトウ等の核果類。

形態及び生態 成虫は体長5mm前後で、口吻は体長の約1/3で内側に曲る。体色は灰褐色ないし赤褐色で、黒味を帯びることもある。体の背面は凹凸が著しく、顕著な1対の隆起があり、全体としてはヒキガエルの背面を思わせる外観である。卵は乳白色の楕円球。幼虫は、体長約6mmで無脚。全体に黄白色で、頭部のみ褐色である。蛹は、体長5mm前後で黄味を帯びている。

本虫は、果樹園やその付近の落葉下などで成虫態で越冬する。春になると越冬場所から果樹に移り葉や花を、そして幼果が形成されると果実に穴をあけて食害する。産卵の際は、果実表面に三日月状の傷をつくり、その中に1個ずつ卵を産下する。1雌当たりの産卵数は100～300個。ふ化幼虫は果実内に食入し果肉を食害する。老熟すると果

実を抜け出し樹下の土中に潜って蛹化する。卵期間は約1週間、幼虫期間は2～3週間、蛹期間は4～6週間である。アメリカ合衆国南部では年2回、北部では年1回の発生がみられている。

モモ、スモモを最も好み、成虫、幼虫とも大きな被害をもたらす。幼虫の加害を受けた果実は、ほとんどが幼果のうちに落下する。成虫による食害痕及び産卵痕は、果実の成熟とともに拡大され、著しく商品価値が低下する。

我が国に分布するモモ、ナシ、リンゴ等果樹の害虫であるモモチョッキリソウムシは、本虫と、被害、生態がよく似ているが、本虫は成虫の大きさが約半分と小さく、また翅鞘に大きなコブを有する等の点から、容易に識別することができる。

防除法 古くから行われている機械的防除法の1つに、樹木を震動させ、樹下に張ったシートに成虫を落として捕殺する方法がある。また、落果を拾い集めて処分したり、表土を耕すことにより土中の蛹を殺すことも有効な防除法とされている。

薬剤防除の場合、少なくとも2回の散布が必要で、落花時と、その1週間後の2回が、最も有効であると言われている。アメリカ合衆国では、防除薬剤として、カルボフラン、アジンホスメチル、ホサロン、CVMP、PMPが使用されているという。

モモキバガ

学名: *Anarsia lineatella* Zeller

英名: Peach twing borer

分布 東アジア、西アジア、ヨーロッパ、ソビエト連邦、北アフリカ、北アメリカ。

寄主 モモ、スモモ、アンズ、オウトウ、アーモンド、リンゴ等の核果類。

形態及び生態 成虫は体長7～8mmで、翅の開張は10～18mm。体は灰黒色。前翅は細長く、前縁には黒褐色の斑紋があり、全体に黒褐色の短条が散在している。後翅はやや褐色を帯びており、前後翅とも長い毛で縁どられている。卵は、約0.5mmの楕円球、初め白色でふ化前にはピンク色に変る。幼虫は、老熟すると10～16mmになり、淡褐色～赤褐色を呈し、背面は赤みを帯びる。頭部は、黒色。蛹は、体長約10mmで、赤褐色。

第3世代の若令幼虫は、樹皮下に浅く潜り、越冬用の巣を造り、その中で越冬する。春に、巣からはい出し、新芽や若枝の先端に食入加害する。老熟した幼虫は、樹皮下や割れ目等に粗い繭を作り、その中で蛹化する。5月頃成虫となり、若枝や葉柄の基部に産卵する。1雌当たりの産卵数は、約140個。第1世代の幼虫は、新梢及び果肉を食害し、成虫は、果梗の凹部に産卵する。第2世代の

幼虫は、すぐ果実の内部に食入加害し、成虫となって幹の割れ目等に産卵する。第3世代の幼虫は8月下旬～9月上旬に現われ、若令で越冬する。発生は、通常年3世代であるが、寒地では2世代、暖地では4世代である。

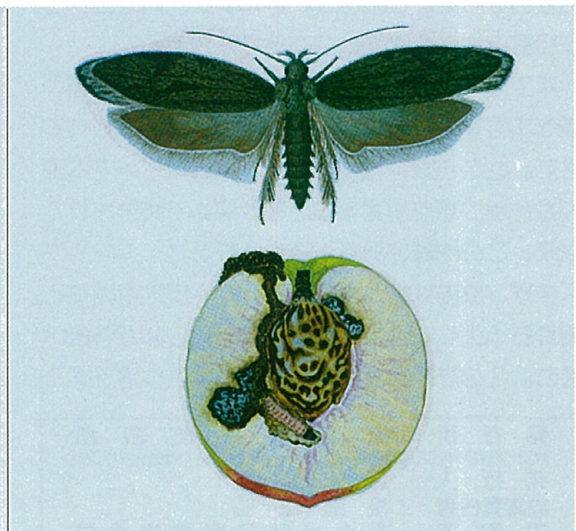
被害は幼虫によるもので、モモ、スモモ、アンズで大きい。新梢への被害は、1頭が何本もの新梢内部を次々に食害して枯死させるため、葉のみを食べる害虫に比べ大きい。果実は、時には核まで暴食され、とくに晩生のモモでは、第2世代幼虫による被害が甚大である。果実の食入口からは虫糞の排出が見られる。

我が国既存の害虫で、本種と被害・生態等の面で類似したものにナシヒメシンクイ、モモノゴマダラノメイガがある。前者は体長5～7mm、翅の開張11～14mmと本虫と比べやや小型。後者は、体長11～13mm、開張25～30mm、翅に小黑点がある黄色の蛾で、幼虫の体長は25mmと大きい。

防除法 我が国のナシヒメシンクイと同じ防除薬剤の適用が可能と考えられる。カナダでは、越冬幼虫が、新梢に移行する時期にアジンフオスメチルやベンゾエピンを散布しており、ソ連の黒海沿岸地域では、DEP乳剤、ジメトエート乳剤又は、NAC水和剤を散布し、効果を得ている。またアメリカ合衆国では、合成フェロモンを用いた誘殺防除も開始されているという。



スモソウムシとスモモの被害果



モモキバガとモモの被害果